「資料２」　を読んで

全国の大学で理系に進む女子が増えない原因は理系の仕事に対して憧れを持つ女子が少ないからだと考える。職業選択と専攻選択は密接に関わっており、将来この職業に就きたいから大学で関連分野を勉強したいと考えて進路選択する人が多い。理系の中でも医・薬系、農学系、生物系の分野では女子が多い。対して、機械系、電気電子系の分野では女子が少ない。このことは将来なりたい職業と専攻の関係性を示している。好きこそものの上手なれという言葉があるように理系分野に興味を持っていないために「理系が苦手」という固定観念に女子自身が囚われてしまうのではないかと考察する。背景として周囲がジェンダーバイアスを持っており、自然と理系キャリアを避けるように教育したのではないかと考察する。

この記事を読んで、在籍している薬学部は女性比率が高いのに対して、他の理系の学部では女性比率が低いことに驚嘆している。これは、例を挙げると、日々目にしている医者という職業は男性が多いため医者は男性がなる職業という固定観念があり女性が医者に就こうと考える環境がないためと考える。また記事にある「リケジョ」という言葉も女性が理系に進学することが珍しいという差別的な表現になるのではないかと考える。現代の日本では、政治家や東京都知事に女性が選出されるなどの女性の社会進出が加速している時代である。そのため女性が理系大学などに進学することへの差別的な考えや女性への理系大学のイメージアップのための活動を積極的に行っていかなければならないと考える。

私は人生の選択において最も重要なのは「自分が何をしたいか」だと思う。自分の気持ちに従いそこを選択した人の男女比が自然と 1:1 程度になるとも言い切れない。そのためリケジョ等で問題なのはジェンダーバイアスなどの周りの影響を受けて自分の気持ちに反した選択をしてしまうことだと感じた。事実としてバイアスはジェンダー、人種、年齢、地域、疾患など様々な事に生じている。世界的に現代社会の多様化に伴い受容し始めているが、日本は多様性が混ざりにくい島国で同調的な文化をもつことがバイアス減少を妨げる原因だと感じる。そのためまずは各個人が色眼鏡で見ないことと、自分の気持ちに正直に選択して行動していくことが大切であると私は思う。

本資料を読み、まず目に留まったのは各国の大学入学者に占める女子の割合である。日本で理工系に進学する女子の割合が低いことは感じてはいたが、具体的な数字での他国との比較からその低さがよくわかり、改善すべき課題なのだと実感した。私はこの課題への対応

として、資料にあるように、理工系分野に興味を持つ機会を増やすことが最も重要であると思う。私は高校での文理選択時に明確な進路が決まっておらず、半ばジェンダーバイアスに従う形で理系を選択した。その要因の 1 つとして、文系に進学した場合の将来的な進路について知る機会が少なかったことがあり、この自分の経験からも、進学後の展望を知る機会を設けることが大切であると強く感じた。

「リケジョ」と言われるとなんだかムズムズしますが、高校の頃確かに「理系に進む女子」の割合が少なく、文系クラスのほとんどが女子だったのを思い出します。

高校時代の文理選択の際、文系を選んだ女子の友人たちは（数 3 とか私きっと出来ないし）という意見が圧倒的でした。しかし男子の一部には理系に進む理由として（まあ、男子だしね）と答えられたことや、勉強ができる男子が文系志望だったにも関わらず理系に引っ張られているのも見ました。ジェンダーバイアスだけでいうと女子だけでなく男子にもこの選択にかなり大きな影響を与えていると言えると思います。

文理選択は将来の自分の将来に関わることでもあるので自分の好きな方を選ぶのが一番です。だからこそ得意不得意ではなく自分の正直な気持ちだけでも進路を選べる雰囲気を積極的に作るのが一番の近道だと感じます。

物理学科入学時，1 学年 40 人弱のうち 5 人が女子であり，教員からも「今年は多い」と話題になった。男女問わずやりたいことをやっていた印象があり，どこかでバイアス改善があったのかもしれない。女子だから劣っていると感じることもなかった。

しかし，物理しかできない変な人との遭遇も考える必要がある。「普通な自分は進学/研究を選ばない」という風潮はすでにあり，理系の出口がそもそも広すぎる。リケジョが増える環境は，普通の人にもよい環境のヒントを与えうる。その一方で，なりふり構わず研究できる変な人たちが大学をなんとか回しているのも確かだ。リケジョという特別視が無くなった環境は，誰にとってもよい環境なのだろうか。それとも創造性が失われた環境なのだろうか。理系能力と現代思想とに挟まれながら，自分の中で答えは出ていない。

この記事を読んで、男子は理系、女子は文系と定着しているイメージがジェンダーバイアスによるものであるということが印象に残った。私が現在通っている大学でも文系の学部と理系の学部の両方があるが文系の学部に女子が集中し、理系の学部に所属する女子の割合が少ない。この状況は国際競争力低下などの問題が危惧される深刻なものであることが分かった。私は大学卒業後、高校の教員を目指しているが、教員として基本的な学習指導や生徒指導の他に、親や教師の思い込みによって生徒の進路の幅を狭めてしまうジェンダー

バイアスの壁を取り払う取り組みを意識して行わなければならないことをこの記事を読んで新たに分かり積極的に取り組みたいと思った。

「教師や親世代の強い思い込みがなかなか事態を変えていかない」という言葉を目にした時、いつか目にしたお笑い芸人のいとうあさこさんの記事を思い出しました。いとうあさこさんは小学生の頃から科学雑誌を読むほどのいわゆる「リケジョ」だったそうで、高校生になった頃には宇宙物理学者になりたかったそうです。それゆえ東北大学の宇宙地球物理学科に進学したかったそうですが、「女の子が理系に進むなんて」と親に反対されてしまい、理系の道を諦めてしまったそうです。21 世紀、令和の時代になってもなお、こういった考えの人は一定数存在します。こういった考えのせいで、女性の活躍できる世界が狭められてしまうことは由々しき問題であると考えます。誰もが自分の学びたい分野で学びを深めることができる世界を創るためにも、理系科目を学ぶことの魅力を広めること、そしてジェンダーバイアスのないフラットな社会づくりをしていくべきだと思いました。

まず，資料を読み「リケジョ」などというラベルを理系女性に貼ること自体がバイアスであり，この資料には無意識に潜む固定観念が表れていると感じた．さらに，パッと見たときに伝わる内容と，詳しく読んだときに伝わる内容が異なると感じた．理系女性を増やすにはジェンダーバイアスを払拭することが重要であるはずなのに，見出しでは理系女性が少ない，または増えないことが強調されている．問題の本質は見出しで語られていることではないし，記事を精読しない人間にはその本質が伝わることはない．もしジェンダーバイアスをはじめとした固定観念の少ない世の中にすることで，よりよい社会になっていくのであれば，メディアの仕事はそれを手助けすることであるのではないかと考えた．つまりこの資料のみを見たとき私はメディアの役割に疑問をもった．

「リケジョ」という呼び方は昨今話題になっている「イクメン」と同様、その言葉自体がジェンダーバイアスを促すものになっているように思える。理系男子のことを「リケダン」とは呼ばない。「リケジョ」という言葉が浸透している時点で、日本での理系男女差別があることが浮き彫りになっている。私個人としては、全ての分野で男女のバランスが良くなければならないわけでもないと思う。しかし、人々の偏見によって子どもの可能性を狭めてしまうのは大きな問題だろう。特に親や教師の勝手な思い込みは子どもに影響しやすい。実際にアメリカの実験で、他者に対する期待が結果としてその実現の方向に働く「ピグマリオン効果」の存在も明らかになっている。大事なのは男女平等ということを第一に考えるのではなく、親や教師など子どもに関わる大人がその可能性を潰さず、興味や関心のある分野を自

ら見つけていけるように支援していくことなのだと思った。

　まず見出しに驚いた。職業的に見て以前よりそういった差別が顕著にみられなくなったため、「女は理系に弱い」というジェンダーバイアスはもう薄れてきていると思った。実際私の通っていた高校は主に理系に寄った学校だったが学年全体の男女比に大きな差はなく、私の所属していた学年に一クラス設置される理数科でもほぼ 1 対 1 の割合だったからということもある。ただ専門的な学習をする（大学に入る）となるとやりたい研究の分野がなかったり将来の職場環境やジェンダーバイアスが残っていたりすることによって stem 分野を進路に選ぶ人が少なくなってきていることが分かった。世間的な風潮や向き不向きではなく、自分が何を学びたいかについて考えて進路選択するべきなのだなと思った。